

Peter · J · MacMillan

ピーター・J・マクミラン

翻訳家

「Who is “making a path through the fallen leaves”?  
The stag? The poet?»

言語をとおして、  
和歌の美意識を探る旅へ

「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の 声聞  
くときぞ秋はかなしき」は百人一首で  
おなじみの和歌だが、英訳しようとす  
るとき、**主体**が省略されていること  
に気付く。紅葉を踏み分けているの  
は、和歌の詠み手か、それとも鹿か。  
二つの世界観の境目の曖昧さが魅力  
だと考えたマクミランは、敢えて主  
語を入れずに英訳した。マクミラン  
の翻訳の軌跡は、和歌が背負う美意  
識を探る旅路でもあった。



TIR就任期間 2017年10月~2020年3月

ピーター・J・マクミラン 紹介ページ   
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/macmillan/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/macmillan/index.html)

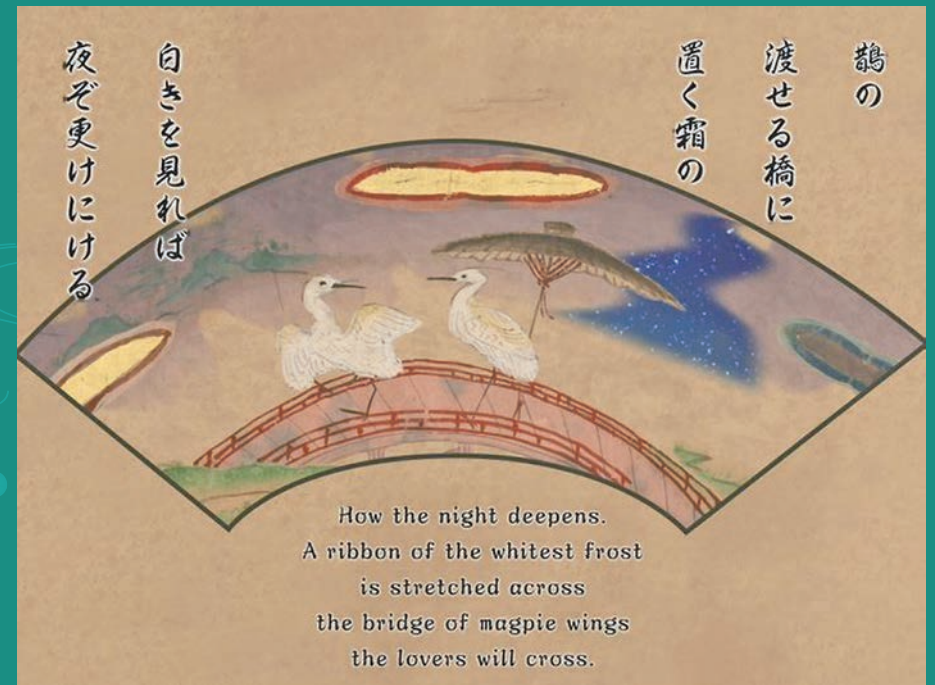


アイルランド生まれ。アイルランド国立大学卒業後、渡米し、博士号を取得。杏林大学教授などを歴任。日本在住歴30年。2008年『One Hundred Poets, One Poem Each』(英訳・小倉百人一首)で日米友好基金日本文学翻訳賞、日本翻訳家協会日本翻訳文化特別賞を受賞。2016年に伊勢物語の英訳『The Tales of Ise』を出版。2017年、『英語で読む百人一首』を文春文庫より刊行。2019年に、英訳百人一首カルタ『Whack A Waka 百人イングリッシュ』をカワダより刊行。

かささぎの わたせる橋にをく霜の 白きを見れば 夜ぞふけにける

How the night deepens.  
A ribbon of the whitest frost  
is stretched across  
the bridge of magpie wings  
the lovers will cross.

天の川にかささぎが翼をつらねてかけている橋、  
その橋に置いている白い霜を見ると、  
ああ、夜が更けたのだなあ。



『扇の草紙』翻訳コンテンツ「Found in Translation」(2020年)

マクミラン氏が「扇の草紙」英訳の過程で感じた日本の自然美や日本文化の魅力を広く発信するために、アニメーション技術や和歌の世界を表現したデジタルコンテンツ。

国文学研究資料館蔵の屏風「扇の草紙」と絵巻『阿不幾集』(114頁)の高精細画像と、書かれている和歌の原文、現代語訳、マクミラン氏による英訳、エッセイ、研究者による解説が搭載されている。

制作:凸版印刷株式会社 監修:国文学研究資料館 翻訳・監修:ピーター・J・マクミラン

難しさ曖昧さこそ魅力

文字と絵が融合する文芸の在り方に関心を寄せるマクミランさんが翻訳に挑戦したのは、扇型の画面に描かれた「絵画」と、その周囲に書かれた「和歌」を一緒に読み解く「扇の草紙」という二群の作品です。さまざまなバージョンが存在する「扇の草紙」のうち、屏風「扇の草紙」(113頁)と巻子本「阿不幾集」(114頁)に出会ったマクミランさんは、研究者と共に、丹念に作品の読み解きを始めました。

和歌と共に描かれている絵は、必ずしもその歌を直接比



イベント「デジタル発和書の旅 ひるがえる和歌たち」

白拍子とともに和歌合せを行った。



百人一首大会  
「100人ぐりっ首」  
(2018年8月/2019年8月)

マクミラン氏のカルタを用いて開催（於立川市柴崎学習館講堂）。立川市の中学生が、英語を通じて和歌の世界に親しんだ。

©えくてびあん



ピーター・J・マクミラン  
「WHACK A WAKA  
百人イングリッシュ」  
(2019年)

マクミラン氏による英訳百人一首カルタ。取り札と読み札に、その歌の世界観を表現した絵を描き、「絵合わせカルタ」のように遊ぶことができるようにしたことにより、和歌の世界により親しみやすくなっている。



恋人との密会のために渡る「宮中の橋」。マクミランさんは、どちらにも解釈できるよう、「the lovers will cross」というフレーズを補って英訳を行いました。

翻訳する上で苦勞した部分にこそ、日本文化の特質を見出すことができる、と考えたマクミランさんは、翻訳の過程で浮かんだ「問い」を手がかりに「扇の草紙」を読み解き、日本文化の魅力を伝えるデジタルコンテンツ「Found in Translation」の開発に取り組みました（制作：凸版印刷株式会社）。

ジュアラル化したものではなく、謎解きを楽しむようなものもあります。たとえば「かささぎのわたせる橋にをく霜の白きをみれば夜ぞふけにける」という歌には、傘をさした二羽の鷺が橋を渡っている絵が添えられており、「かささぎ」という言葉を導く判じ絵のようになっています。

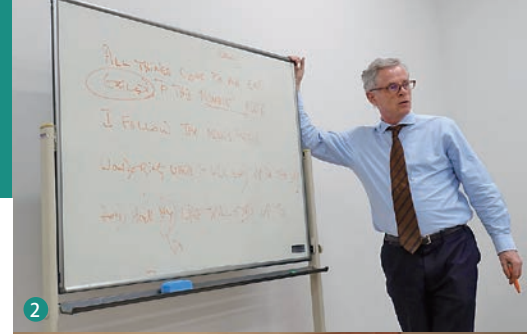
また、さまざまな解釈が可能な歌も。「かささぎの」の歌に登場する「橋」には二つの解釈があります。ひとつは、年に一度七夕の日にだけ天の川にかけ、織姫と彦星の束の間（つかの間）の逢瀬を手引きする「鶴橋」、もうひとつは殿上人が

ワークショップを経て

時には謎解きが求められる  
 「扇の草紙」について、研究者と  
 共に読解してゆく過程で、日本  
 と西洋の文化的背景の違いや、  
 それぞれの魅力について議論を  
 交わしたり、英語の詩として表  
 現する際に、さまざまな要素を  
 どのように取舍選択すべきか検  
 討し、推敲を重ねた。また、「扇  
 の草紙」の魅力を十分に表現で  
 きる形で翻訳を発表するために、  
 凸版印刷株式会社を交え、議論  
 を繰り返した。



1



2



4



3

「Found in Translation」を活用しながら、『扇の草紙』の魅力について語る  
 マクミラン氏とキャンベル館長の対談動画  
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/macmillan/ogi2/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/macmillan/ogi2/index.html)



古典インタプリタ日誌(ワークショップ詳細)  
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#peter>



1 完成した「Found in Translation」を活用し、キャンベル館長と共に日本文化の魅力を語り合う。  
 2 「扇の草紙」のより良い翻訳の在り方を、研究者と共に追求した。 3 4 「ひるがえる和歌たち」で「扇の草紙」について語る。

ピーター 9



おぎ そうし  
『扇の草紙』 江戸初期写 6曲1隻(屏風1曲:縦95.5cm×横284.4cm、料紙:縦31.8cm×横24.0cm)

扇絵とそれにちなむ和歌を描いた「扇の草紙」と総称される作品群のひとつ。「扇の草紙」は、実際の扇絵を見せて画題の和歌を当てる遊びから生まれたとされ、室町後期から江戸前期にかけては絵巻や奈良絵本にも仕立てられた。本作は奈良絵本の料紙を屏風に貼り付けたもので、扇絵の背景に扇同様、風に縁のある柳の木を描く点に特徴がある。青々とした春の柳や雪の積もる冬の柳なども見え、四季を描き込もうとする意識がうかがえる。(恋田知子)

Commentary

ピーター 4



つるまるもん うた  
『鶴丸紋ちらし哥かるた』 江戸中期写 かるた 1箱(上下札各100枚)

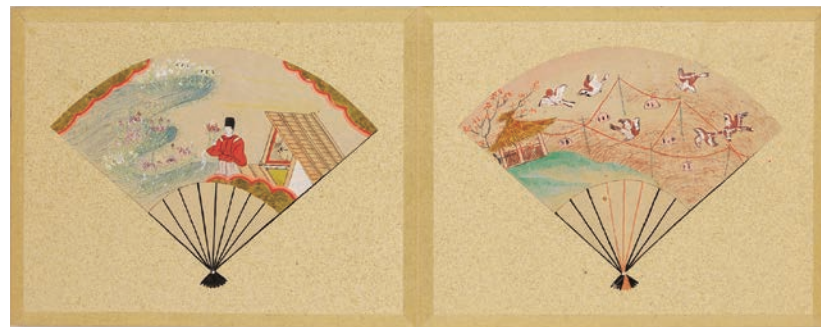
歌仙絵入りの百人一首かるた。箱は二重で、漆塗内箱の鶴丸紋から一説に日野家旧蔵かとする。読み札は上部に作者名と上句、下部に歌仙絵を描き、取り札は下句散らし書き、いずれも帙の内側に舞楽の図を描く。江戸初期の図様では崇徳院を臣下用の高麗縁量に配するが、本作では天皇用の纏網縁量に配する。また、ともに纏網縁量を配されることの多い祐子内親王家紀伊と待賢門院堀河のうち、後者のみ高麗縁量とする点に特徴がある。(岡田貴憲)

Commentary



おうぎしゅう  
『阿不幾集』 室町末期写 卷子1軸 縦18.2cm×全長380cm

通常の絵巻の半分ほどの大きさの「小絵」と呼ばれる絵巻の「扇の草紙」。扇流のように傾きをもたせ、黒骨を付けた扇面が全30図描かれ、対応する和歌30首を添える。画風はおおらかで素朴ながら、背景の景物まで省略せずにしっかりと描き、物語絵の趣を感じさせる。上質の鳥の子紙の料紙に金泥・銀泥・丹を豊富に使用した豪華絵巻。表紙や絵巻を収める内箱も制作当時のものと考えられ、箱表に「阿不幾集」と墨書されることから、「あふき集」と称されていたことがわかる。(恋田知子)



ならえまめおぎずめん  
『奈良絵豆扇図面』 江戸前期写 画帖1帖 縦14.1cm×横17.8cm

もと冊子本か絵巻であった「扇の草紙」から、扇絵のみを扇骨の部分まで切り抜いて画帖に貼り付けたもの。他に例を見ない形式の「扇の草紙」で、書名は本作を収める帙に貼られた後題籤に基づく。和歌が付されていないため、画題の特定できない扇絵もある。杜若の咲き乱れる入り組んだ水辺に佇む貴公子の扇絵は、『伊勢物語』第九段「東下り」、八橋での和歌「から衣きつつなれにしましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」を描いたものであろう。(恋田知子)

小論文

# 『扇の草子』の魅力

——三つの扉と三つの世界——

Yasuhara Makoto

安原 眞琴

立教大学  
兼任講師

古典文学の中には、歴史に埋もれてしまつて知られていないものがたくさんある。また、その中には、知らないともったいないものもたくさんある。『扇の草子』もその一つだ。戦国時代末期から江戸時代初期の人たちに大変人気があったようなのに、今となつては、どんな人たちが制作し、どう享受されていたかさえよく分からない。

でも、どうやら、古典文学と聞くとちよつと堅苦しさがあるが、『扇の草子』は（読むよりも）見るく、且つ（文

学)よりも(遊び)との親和性が高い、簡単に言えば、見るだけで楽しめる作品群のようである。伝本には原型を留めるものは少なく、断簡と呼ばれる、冊子本から切り離された一頁分しか残っていないものが多いのだが、これも、一頁でも持っていたい、眺めていたいという人が、たくさんいたことを物語る。

また、断簡も含めた伝本数は、毎年のように巷間から発見されるなどして増えており、管見の限り二〇二〇年現在五五本にのぼるが、ほとんどが十七世紀前後に作られたものなので、この時期の需要が高かったこともわかる。なお、『扇の草子(草紙)』とは全伝本の総称で、実は伝本にはさまざまな書名が付いているので、便宜的に付けられたのである。

さて、魅力はいろいろあるが、ここでは、扉と世界にたとえながら三つあげたい。『扇の草子』は、扇面の枠内に描かれた(絵)と、その周囲に散らし書きされた(和歌)から成るが、まず(和歌)という扉を開こう。

した(遊び)の世界である。伝本には、扇絵は挿絵として描かれているが、このような形態になる以前は、本物の扇に絵が描かれた実際の扇絵を見せて、それが何の和歌を描いたものかを当てる、なぞなぞのような(遊び)が行われており、『扇の草子』はそれを基に冊子本や絵巻といった体裁にまとめられたもののようなのである。

東京国立博物館所蔵の『月次風俗図屏風』は、その(遊び)の世界がどのようなものだったかを伝えてくれる貴重な絵画資料である。それによれば、扇絵から和歌を当てるなぞなぞ遊びは、裕福そうな子ども(小学一年生くらいの子)のための、野外のお花見パーティーにおけるゲームとして楽しまれていたようである。この遊びには、楽しみながら和歌を覚える、教育的な側面もあったのだろう。

見てきたように『扇の草子』は、三つの扉と三つの世界を内包する、豊富で複雑な魅力を持っている。

すると、四季折々の自然の美しさから、喜怒哀楽といった繊細な心情まで、日本人のさまざまな心の世界に誘われる。

次に見えてくるのは、(和歌)と(絵)が融合した扉である。テキストを(主)、それを説明する絵を(従)とする絵本は多いが、『扇の草子』の場合、両者は不可分の関係にあるので、扉も二つで一つになっており、その扉を開けると、和歌や絵を単体で見ているときには気付かなかった、新たな世界に出会うことができる。

例えば、算数の九九を詠んだ(和歌)と、一頭の猪の(絵)がある(挿図参照)。もちろんそれぞれ別々に鑑賞することもできるが、和歌と絵で一如の扉を開けると、動物の猪(しし)と九九の四四(しし)とが二重写しになった、不思議な世界が立ち現れる。

最後に、(扇)という扉を開くと、さらに意外な世界に逢着する。それは、(文学)というジャンルを超越



挿図 架蔵『扇の草紙』伝嵯峨本(複製)。

もつとも魅力は三つに留まらない。むしろ、見る人ごとに異なる扉と世界が現れる、魅力の尽きない作品群と言った方がよいかかもしれない。ただ、扉は常に目に見えるとは限らない。それを探すコツは(和歌)や(絵)、(文学)や(遊び)といった既存のジャンルに拘らず、心と頭を柔軟に解き放つことにありそうだ。

安原真琴(立教大学兼任講師)

著書に『扇の草子』の研究―遊びの芸文』(ベリカ出版社、二〇〇三年)、共著『A Book of Fans』(Karolinum、二〇一六年)、映画『Last Geisha-Madame Minako』(makotooffice、二〇一三年)撮影・編集・制作などがある。

# ないじえるというプリズムで 日本文化を再考察する重要さ

塩野入 弥生



## Profile

塩野入 弥生 Yayoï Shionoiri

クリス・バーデンのエステートとナンシー・ルービンススタジオのエグゼクティブ・ディレクターとしてバーデンの遺作の管理と、ルービンスのアーティスト活動の促進を行う。創造産業分野で活躍するクライアントを法律面で支援する東京のシティライツ法律事務所の米国アライアンスパートナーでもある。アートと法律の分岐点についての記事を多数発表。アーティストのマネージメント、契約書の取り交わし、著作権に関する問題、そして展示に関わる法務全般に造詣が深い。米日財団日米リーダーシッププログラムフェロー、そしてアジアソサエティ Asia 21ヤングリーダーも務める。ハーバード大学卒業。コーネルロースクール修了。コロンビア大学日本現代美術史修士課程修了。(www.yayoishionoiri.com)

それは、二〇一九年八月に遡る真夏日。立川柴崎学習館の講堂に足を一歩踏み入れると、張り詰める空気の中、中学生の皆さんが、対面し正座して、一心不乱に集中している光景が目に入りました。皆さんが没頭しているのは、小倉百人一首。それも、ピーター・J・マクミラン先生の英訳版でのかるた大会です。

例えば、光孝天皇の十五番の歌は、マクミラン先生の英訳  
だとなりります。

For you, I came out to the fields to pick the  
first spring greens.

All the while, on my sleeves a light snow  
falling.

抑揚をつけた詠み方だと、朗唱のようにも呪文のようにも聞こえるのですが、最初は、耳で聞き慣れた日本語の美しい言葉とは全然違う英語の節に、若干、違和感を感じたことも確かでした。しかし、かるた大会が進むにつれ、マクミラン先生の英訳が、自然と頭の中で日本語に変換される不思議な感覚を覚えました。北アメリカで育ち、大人になってから日本社会に触れ合う機会が増えつつも、仕事上は、英語

を主要言語としている者としては、このような二カ国語の相互変換は言語の変換のみでなく、異文化の境目を縮める行為が目当たりで行われているようで、とても感慨深く拝聴させていただきました。

日本語と英語は、言語としての文法はもとより、コミュニケーションの戦術や、ニュアンスなども大きく異なります。そして、文化の象徴でもある言葉は、書かれたものでも、口頭で伝えられたものでも、生きている証として歴史を構成かつ記録する手段でもあります。そうすると、日本を日本たるものに定義つける一要因でもある日本語とその記録を綴った古典籍を、様々な切り口から再考察することが、ないじえる芸術共創ラボの存在意義なのかもしれません。結果として形になるものは、現代アーティストが時空を超えての古典籍との合作だったり、かるたのような伝統的な遊戯が新しい形に蘇ったり、など、多種多様ですが、一人一人が携わったその過程こそ、日本語、そして、日本文化の奥深さ、奥ゆかしさ、華やかさ、哀れなどを再発見できることが素晴らしい、と感じます。

ないじえる芸術共創ラボは、古典籍という紙媒体を扱っている研究所にも関わらず、ネット上での情報発信を積極的に行っていることも、海外にいる自分としては、嬉しい限りです。もちろん、百聞は一見にしかずなのですが、サイトで動画配信やインスタグラムなどで疑似体験ができることは、ないじえる芸術共創ラボの「現在」を知ることができま  
すし、活動を記録する大切な見聞録にもなることを願って  
止みません。

古いものは、解読しづらいと感じられがちな今この頃ですが、情報の宝庫であることも間違いないと思います。ないじえる芸術共創ラボは、違つ分野の専門家と一緒に、文化・時空・媒体までを越境するコラボレーションを通じて、その探究の楽しさや醍醐味を私たちに教えてくれているように思います。ないじえる芸術共創ラボに携わっているロバートキャンベル館長や有澤知世先生、そして国文学研究資料館の神作研一先生などの日々のご尽力や研究結果がこれからも、より多くの方に知っていただけますように。そして、これからも、ご活動を遠い空の下から応援していきます。